



つれづれ時事寸評12

「第21回日本介護福祉学会を 総括する」

本研究所研究員 横山 孝子
(介護福祉)

第21回日本介護福祉学会大会を、平成25年10月19日～20日の日程で無事に終了することができた。大会長に岡本恵也学長を依頼し、1年余りに及ぶ準備から当日の運営に至る総勢65名の実行委員の努力の賜であり、実行委員長としてご協力、ご支援をいただいた方々に先ずは感謝の意を表したい。衷心より感謝を申し上げる次第である。

大会企画のコンセプトは、介護福祉の動向を見据えた問題提起及び将来を展望したテーマに、熊本らしさや本学らしさを加えることとした。検討の結果、大会テーマに『現在から未来への“ケア”のあり方を問う』と題し、シンポジウムⅠ「ケアでつなぐ在宅と地域」、シンポジウムⅡ「高齢期と“ちょうどいい”医療・ケアを考える」を配し、熊本をはじめ九州圏域で先駆的な取り組みをしておられる方々をシンポジストに選定した。これら背景には、高齢者福祉において国が目指している地域包括ケアシステムの構築が射程にある。ここに熊本あるいは本学らしさを意図して、ランチョンセミナーそのものに「命をみつめる」のテーマを設け、その1「水俣病患者の福祉の課題と被害の社会的意味」、その2「ハンセン病回復者の現状と課題」、その3「いのち“こうのとりのゆりかご”は問いかける」の立場から登壇を願った。

既に大会第1日目の終了時点で、“内容が

濃かった” “いいシンポジウムだった”等の称賛する参加者の声が届いた。これに力を得、心一つにして15会場で同時進行の第2日目午前中の分科会発表や続けての会場別ランチョンセミナー、また午後からのシンポジウムⅡも、裏舞台の喧騒に目を瞑れば無事に乗り切れたと評していいだろう。いや、そのように評したくなるほどに、実行委員会メンバーの真摯な頑張りに感銘を受けたのも事実である。

ここで、コーディネーターの任を果たして頂いた両先生の、シンポジウムテーマの観点からの見解をご紹介します。

第1日目のシンポジウムⅠ（豊田謙二教授）：本大会が始まるに先立ち、シンポジストには、テーマを伝えるとともに事前に次のように提議していた。つまり、事例を示しながら「認知症の人が一人暮らし」、その生活支援を課題としたい、というものであった。その課題に対してシンポジスト三名いずれもが、期せずして「場」を創ることを提案した。それらは活動の場であり、お茶でつながる場であり、また開かれた場というものである。

少し具体的に言えば、家族のそとで、あるいは一人暮らしの認知症の人と他者との「あいだ（＝間）」をつなぐことが重要なのである。その点に関連して初めて、場を築くことの意義が明確になる。場が、社会的ケアの結び目になるからである。その「ケア」という用語は「介護」と置き換えられない。「介護」の用語にはつなぐ意味合いが弱いからである。

場は、集い・寄り合うことの重要さとともに、専門職が認知症の人の症状の変化や家族の悩みに気づく機会を提供する。

第2日目のシンポジウムⅡ（小川全夫教授）

：シンポジスト1人目の「地域に眠る埋蔵金」では、模擬デス・カンファレンスのデモンストラーションを紹介された。関係者は、居宅で死に逝く過程に立ち会ったら、それぞれの思うことを、決して否定的な語りにはせず、よかったこと、もっとよくするために気づいた語りに仕上げ発表し、感想を述べあう姿が例示された。このカンファレンスは、遺族をまじえた専門職たちの死に対する納得とさらなるケアへの洞察意欲を高める効果がある。

2人目の「暮らしの中で“死に逝く”こと」では、ビデオレポートから紹介された。空き家を借りて、もうひとつの自宅ともいべき環境の下でホスピスを実施することで、入院先で食べることができなくなり、胃ろうを造設され、認知症状やADLが極端に低下した患者が、適切な口腔ケアや日常的な暮らしのケアによって改善がみられた実績を例示した。今では全国的にホームホスピス運動が広がり始めている。

3人目の「高齢者施設での大往生」では、施設入所者の死に対して、日常的に世話していた介護職員が死に立ち会えない達成感の不全状態を解決するために、遺族の葬式の中で介護職員に弔辞を読む機会を与えてもらうという働きかけをしている実態を例示した。入所者の大往生によりそうということは、単なる看取り加算という問題だけではなく、職員の達成感の問題であり、同時にそれは他の入所者に対する信頼と安心を喚起することにもつながることである。

死は、いわばどれだけ自問自答しても解けない謎かけである。遺された者たちとして、遺族も専門職も、あらためてこの謎かけに、

どこかではじめをつける他ない。“ちょうどいい”医療・ケアには、関係者がそれぞれの行動原理を突き詰めながらも、決して自分だけで謎を解こうとしないことが重要である。みんな違っていいのだから協働をもってよしとするという姿勢が大切なのである。

最後に、本大会が企画者の予想を超えて支持された理由を考えてみたい。

本学会「日本介護福祉学会」は、1993年に故一番ヶ瀬康子氏らによって設立され、2012年に20周年を迎えた。この間、特に2000年の社会福祉基礎構造改革以降、社会福祉の制度、政策は大きくパラダイム転換をした。その背景の1つに、高齢者像の変化があげられる。超高齢社会の下で、介護福祉領域に求められる介護モデルは、従来の身体介護モデルに合わせ認知症ケアモデル、更には看取りケア、医療的ケアの実践力も求められている。また介護サービス提供の場も施設ケアから在宅ケアへとシフトし、住み慣れた地域での生活の継続性が謳われている。

国が目指す新たな地域包括ケアシステムにおいて、“これからの介護福祉はどのようなのであればよいのか”、関係する誰もが模索しているのではないだろうか。そのような問いを立てることの必要性を、介護福祉の現場や教育の第一線で感じ取っている学会員の意識が、地方都市での開催にも拘わらず295名（発表演題数114題）という参加者数に反映したものと考える。

学生と共に学会運営に奔走しながら、介護福祉士養成教育に携わる教員の一人として、取り巻く情勢の変化に慧眼をもって臨みたいという思いを強くした体験であった。